

特集論文

自学習のできる子どもを育てるための国語教育

Japanese Language Education to Cultivate Student's Autonomous Learning

森下 まちこ
MORISHITA Machiko
(和歌山大学教職大学院)

伊澤 真佐子
IZAWA Masako
(和歌山大学教職大学院)

田中 美羽
TANAKA Miwa
(和歌山市立浜宮小学校)

宇治田 乃
UJITA Sono
(和歌山大学教職大学院学校改善
マネジメントコース大学院生・
和歌山市立小倉小学校)

受理日 令和3年1月31日

抄録：文部科学省による「新型コロナウイルス感染症対策に伴う児童生徒の『学びの保障』総合対策パッケージ」と称する、子供たちの学びを支えるための支援策にもあるように、学校現場には、家庭学習を効果的に用いて授業を協働学習など学校でしかできない学習活動に重点化し、限られた授業時数の中で効率的に指導することが求められている。著者らは、学校が課す家庭学習の内容が、学校再開後の学習の進み具合に大きく影響が出ると考え、「自学習」のできる課題の出し方を中心に研究を進めることにした。休業期間中に提出された児童の課題ワークシートからは、家庭学習では前学年の既習事項が、教師が思ったほど児童は使えていないことが見えてきた。各教材で指導すべき指導事項を押さえた指導を行い、確実に習得させ、次につなげることの重要性を再認識した。

キーワード：自学習、家庭学習力、家庭学習の課題

1. はじめに

令和2年6月5日、文部科学省は「新型コロナウイルス感染症対策に伴う児童生徒の『学びの保障』総合対策パッケージ」と称する、子供たちの学びを支えるための支援策をまとめた。そこでは、あらゆる手段で、子供たち誰一人取り残すことなく、最大限に学びを保障することを目的として、学校現場に対し、授業を協働学習など学校でしかできない学習活動に重点化し、限られた授業時数の中で効率的に指導することが求められている。

また、子供たちの学びを止めないために、学校が課す家庭学習のあり方がますます重要な鍵となることと、教師によるきめ細やかな状況把握による学校での学習の充実を図ることが大事であると謳われている。

和歌山県においても3月～5月まで約3か月学校が臨時休校となった。この間の学校が課す家庭学習の内容が、学校再開後の学習の進み具合に大きく影響が出ると考え、「自学習」のできる課題の出し方を中心に研究を進めることにした。

2. 自学習する力をつけるための教師の手立て

田中(2020)は、子供の家庭学習力を、「家庭での規則正しい健康な生活習慣の基盤の上に、子供が家庭での宿題、予習・復習、そして自主的学習等を計画的かつ自律的に行うために必要な能力や態度」と定義している。その上で、「子供の家庭学習力とその根幹をなす自己マネジメント力を育てるために新しい授業の在り方を探っていくことは、今まさに求められている子供たちの主体的に学習に取り組む態度を回復させる教育を生み出す原点になるといえるだろう」(p.111)とし、子供の家庭学習力を育む大切さを主張している。学校が課す家庭学習の内容とともに、それを行う上で必要な能力や態度を教師が正しく見取り、適切な手立てをしていく必要がある。

また、学校における授業と、学校の授業以外の場での学習活動との分担と連携について、天笠(2020)は、従来からの宿題について、その在り方を精査する必要があるとし、「宿題の単元や年間計画における位置の明確化が問われるところである。さしずめ、

学校の授業と家庭での学習との関係を〈見える化〉する必要がある。」(p.108)と指摘している。この、学校での授業と家庭での学習活動の分担と連携をどう図っていくのか、国語科の特徴を捉えてどのような手立てが必要なのかを見直し、学校での授業改善をしていくことは今後ますます必要となってくると考える。

2020年度、分散登校期間中に、和歌山市立浜宮小学校の田中美羽教諭（以下授業者と呼ぶ）は、教材を児童が家庭で自力学習できるようにするために、学習の手引きとワークシートを作成した。この手引きとワークシートによって、今まで授業中に行っていた学習の一部で、既習のため自力解決できるだろうと考えた部分を、児童が各家庭で行えるように計画したのである。児童が学校に登校した時に学習が効率よく進み、しかも国語科の資質・能力を着実に身につけるためには、どのような内容にすると良いのかについて、授業者は、著者らと相談しながら作成していった。以下では、家庭でできる自力学習の力をつけるために工夫し指導した実践事例を取り上げる。

2.1. 小学校5年生の授業実践から：「動物たちが教えてくれる海の中のくらし」（五年 東京書籍）

この教科書教材は、「データロガー」という小型の記録計を取り付けたペンギンなどの海の中で暮らす動物の写真から始まる。海中で暮らす動物に取り付けた小型記録計を使って、多くのデータを集め、分析、考察を繰り返しながら、多くの動物たちの進化は、それぞれの生息環境に合わせて暮らしぶりを工夫し続けた結果であると結論付けていく。そして、小型記録計の改良によりこの先も動物たちから学べることがたくさんあるだろうということが書かれている。

この単元では、「筆者の伝えたいことをまとめよう」という言語活動が設定されている。東京書籍の小学校国語科の教科書は、教材文が提示される前の1ページを使用して、その教材で育成が望まれる資質・能力について、「言葉の力」として示される作りになっている。この教材では、「要旨を捉える」ことが「言葉の力」として提示されている。

重点指導事項は、学習指導要領における「思考力、判断力、表現力等」の「C 読むこと」(1) ア「事実と感想、意見などとの関係を叙述を基に押さえ、文章全体の構成を捉えて要旨を把握すること」となっている。

2.1.1. ワークシート・学習の手引きを活用した家庭での自力学習の手立て

まず、「学習の手引き1」という教材(図1)を作成するために、既習事項を確認することから始めた。4年生までの説明文の「読むこと」の既習事項としては、

以下の5点が挙げられる。

- ①はじめ・中・終わりの文章構成をつかむ。
- ②形式段落ごとに大切な一文やキーワードを見つけ、要点を体言止めでまとめる。
- ③要点から、まとまりを見つけて意味段落にまとめる。
- ④意味段落ごとに小見出しをつける。
- ⑤意味段落ごとの小見出しから、全体を要約する。

授業者は、多くの児童にとって要旨を捉えることは難しいと、これまでの指導経験から感じている。「序論・本論・結論」という文章構成の中でも、結論に筆者の主張があり、これが要旨になるので、要旨を捉えるためにはまず、文章全体の構成を捉える力を身に付けさせなければならないと考えた。そこで、4年生で学習した説明文の教材「アップとルーズで伝える」(四年下 光村図書)を取り上げ、既習事項を確認しながら自力で取り組める「学習の手引き1」(図1)を作成した。教材「アップとルーズで伝える」の文章を引用しながら序論・本論・結論という構成を思い出させ、文末表現や事例について例を挙げて示し既習事項を思い出した後で自力で取り組めるよう、「◎」の印の後の文章で新しい教材の問いを示した。

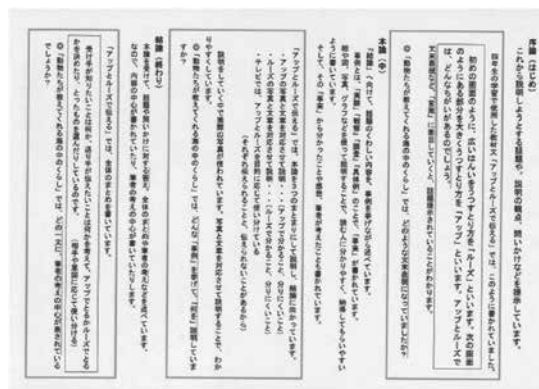


図1 学習の手引き1

次に、ワークシート1、2(図2、図3)として手順を書いて段落のつながりを意識させるようにした。文章の構成を確かめながら教材を読むためである。

(低学年のふく習)
1. 「動物たちが教えてくれる海の中の暮らし」には、全部でいくつの段落があるでしょうか。
教科書に段落番号を書き入れていきましょう。
いくつありましたか？ () 段落

(中学年のふく習)
2. それぞれの段落はつながりがあり、大きなまとまりを作ります。
「はじめ」・「中」・「終わり」の3つのまとまりに分けてみましょう。
どの段落がどこになりますか？
それぞれのまとまりには、どんなことが書かれていますか？
(下の表を参考にして、ワークシートに書き入れてみよう)

終わり (後編)	中 (本編)	はじめ (序編)	まとまり
			段落
			要点

この文章の「中」の部分は、事例からさらに三つのまとまりにわけられることがわかる (㉑ ㉒ ㉓)

ペンギンとアザラシの泳ぐ速さと体の大きさとの関係

図2 ワークシート1

終わり (後編)	中 (本編)	はじめ (序編)	まとまり
			段落
			要点

この文章の「中」の部分は、事例からさらに三つのまとまりにわけられることがわかる (㉑ ㉒ ㉓)

ペンギンとアザラシの泳ぐ速さと体の大きさとの関係

図3 ワークシート2

また、本論における論の進め方について学ばせるためにワークシート3を作成した。

終わり (後編)	中 (本編)	はじめ (序編)	まとまり
			段落
			要点

図4 ワークシート3

このように、既習事項を思い出させる説明を付けたり、例を挙げたりしながら児童が主体的に学習に取り組めるプリントを作成している。

さらに、要点のまとめ方を3段階に分けて説明した「手引き2」(図5)を作成し、その後「要旨をとらえる」ための「手引き3」(図6)を配るなど次の説明文教材では自力で要旨を捉えられるようにポイントとなることを整理して示している。この手作り教材では、身につける言葉(国語)の力として、1年生から学習した説明文の教材名を示して、今までに身につけた力を活用して次のステップに進んでいくことを意識させている。そして、新しいことを学習する前には必ず、今までどんな言葉(国語)の力をつけてきたのかを振り返り、今までにつけた力を活用して次のステップに進んでいくことができる、つまり自力解決のイメージがもてるように作成しているのである。

要点のまとめかた

- いくつかの文章で構成されているのか調べる
- 中心となる大切な文を見つける
(だいたい、一文をぬき出すが、時として二〜三文になることもある)
大切な文とは？
・その文の役割を考えよう
・それぞれの文の中から、結論が述べられている文を見つけよう
・主語と述語から見つけよう
- 短い文にまとめる
ぬき出した一文を短くまとめることで「要点」とする。
その際、
・主語、述語、キーワードを見つけて文にしましょう。
・文末は 止めた形にしましょう。(体言止め)
3年生で学習した「すがたをかえる大豆」を例にすると、
「いろいろな手をくわえて食べるくふうをしている大豆」
のような文にしましょう。

図5 手引き2

「動物たちが教えてくれる海の中の暮らし」で身に付ける言葉(国語)の力

ようし
要旨をとらえる

要旨とは？
書き手が文章で取り上げている内容の中心となる事や、書き手の考えの中心となる事などをまとめたもの

1年生から4年生まで、たくさんの「説明文」を使って、言葉(国語)の力をきたえてきましたね。
こんなお話を読みました、覚えてますか？(思い出してみてくださいね)

1年生では、「くもばし」「じどう車くらべ」「どうぶつのもやん」など
2年生では、「たんぼほのちえ」「しかけカードの作り方」「おにごっこ」など
3年生では、「こまを楽しむ」「すがたをかえる大豆」「ありの行列」など
4年生では「聞いて、考えて、また動く」「アップとルーズで伝える」うなぎのなぞを遊べて

新しく学習をする前には、かならず、今までどんな言葉(国語)の力をつけてきたのかがふり返ります。今までに身につけた力を活用して、次のステップに進んでいくイメージを持ってください。

高学年	・「問い」「答えをみちびくための具体例の説明」「答え」「まとめ」という構成になっていることが多い。さらに、具体例のあとに、筆者の主張が書かれていることが多い。 ・「筆者の主張」を見つけることで、「要旨」をとらえることができる。 ・「問い」を解き明かすための具体的な方法や解き明かすための過程が書かれている。(実験、観察、調査、具体例、事例など)
中学年	・「要点」(筆者が何を述べようとしているのか)をとらえる。「要点」とは、段落中のポイントと考えるとよい。
低学年	・「問い」～でしょうか。(～でしよう「か」がつかない時もある) ・「答え」～である。～というわけです。等の文を見つける ・「形式段落」 一字空きの部分を見つけることでわかる。

要旨をまとめる力を身に付けるためのステップとして、
今までの学習してきた言葉(国語)の力を使って、1～3に取り組みましょう。

図6 手引き3

「家庭学習アイデアブック」の中で田中（2017）は、家庭学習のアクティブ化の達成方法を4つ挙げた中の2つめに、「資料活用型予習」を挙げている。これは、課題の解決のために必要な資料をあらかじめ読解しておくというもので、「これまで授業時間を使って読解していた資料の一部を家庭学習に回して授業時間を節約するとともに、課題解決に関わる見通しをもってきたり、自分の意見や解決策をイメージ化してきたりといったことを可能にしたい。」(p.11)としている。そして、資料活用型予習のための読解ブックレットのようなものを作成することが大切だと主張している。この田中教諭の実践ではその読解ブックレットに手引き1～3があたる。これまでの既習事項に合わせて、教師が児童の実態から丁寧に、自分の考えのまとめ方などを解説することで、やり方ややる意義が分かり、意欲的に予習に取り組める手立てとした。

2.1.2. 授業での手立て

提出された児童らのワークシートを見て授業者は、形式段落は理解できているが、意味段落や要点が理解できていないことや要約の力がついていないということが分かった。

具体的には、段落ごとの中心となる語や文を見付けて要点を書き出すことも難しいようであった。これは、第1学年及び第2学年の「読むこと(1)ウ：考えて選び出す」からつながり、第3学年及び第4学年「読むこと(1)ウ：要約」の部分である。

そこで、既習事項ではあるが、段落には役割があることや、読み手が必要な情報を見つける上で重要となる語や文を見出すことについて、習得する時間を別に設けることにした。また、その学年で押さえるべき用語、言葉の力を繰り返し学習し、定着させる必要性を強く感じ、次の表1の5点を中心に分散登校後、授業を行った。

今回、家庭で自力解決できるように学習の手引きや

表1 分散登校後の指導内容

学習活動	指導内容
①文章構成全体を見る	三段構成 序論・本論・結論 尾括型
②形式段落から要点をまとめる	中心的な文を見付ける⇒キーワードを見つける。考えの中心の一文を抜き出し、できれば体言止めにする。
③意味段落の小見出しをつける	主語連鎖の関係から小見出しをつける。
④要約の方法を知る	・要点をつなげて文章化する。 ・目的や必要に応じて簡潔にまとめる。
⑤要旨のまとめ方の型を教え、適切な要旨の整理の仕方について知る	「○○(本論)の調査を通して、○○ということが分かった。そこから○○という考えを読み手に伝えていきたい」(型を示す)
⑥対話で自分の考えを深める	

ワークシート等を作ったことにより、授業者は、児童のつまづき箇所が分かったので、そこを授業で丁寧に視覚化して押さえ、日常でも繰り返し使うようにすることで力を定着させなければならないことを再認識できた。「動物たちが教えてくれる海の中の暮らし」の学習後の振り返りには、児童から「本論の終わりの段落は、結論ではなくて、本論のまとめ(本論を一旦まとめた文章)が書かれていることがわかった」や「文末表現に着目すると、筆者の考えが分かる」といった記述が見られた。

そこで、次の単元では、自力で構成表を完成させる力が付くように、構成表を掲示し(図7)、機会を捉

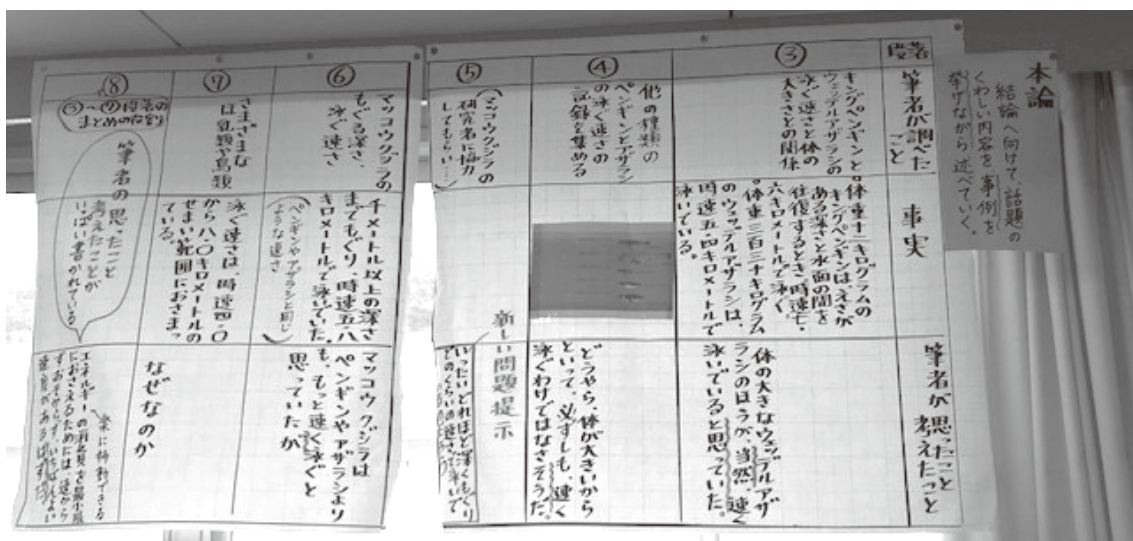


図7 構成表(教室掲示)

えて文章の構成を意識させるようにした。また、朝の会の日直のスピーチでも、序論・本論・結論の3部構成を意識させるなど、日常生活の中でも、「話すとき」「書くとき」に文章の構成を意識させるよう声かけを意図的に行った。そのような取り組みの中で、「今の話、序論と本論だけで終わったよ。」「先に序論を言わないとわからないよ。」「先に結論を言ったほうが興味がわくよ。」と児童同士が言い合うようになってくるなど徐々に成果が見られるようになった。

授業者は、今回の実践で、以前から意識していた3つのことが、家庭学習における自力解決力をつけるために大切だとより意識するようになったと語っている。それは、①学習用語の意味と使い方・作り方の方法をきちんとおさえること、②論の進め方を読み取る手順を教えること、③表の縦軸、横軸にはどのような項目があると比較したり、要旨を捉えたりしやすいのかを意識させることである。

説明文以外の領域でも、この3つを意識して指導することで定着を図ることが、国語科における自力学習の力をつけることにつながると考える。

「国語授業の技術」で白石(2013)は、「国語の授業では、『誰もが納得できる意見や感想』を導き出す読み解き方を教える必要があります。その土台になるのが『用語』、『方法』、『原理・原則』なのです。」(p.8)と記し、「用語」「方法」「原理・原則」の土台をしっかり身につけることの必要性を主張している。また、この土台をしっかり身に付けることで、さまざまな場面でそれを活用することができるとし、「他へ転移できる力」を養うことも授業の大きな目的としている。

言語能力は全ての教科において培われるものだが、中心となって指導するのは国語科である。全ての教科と連携した指導を考え、国語科で学んだ学習を活かしていく必要がある。この実践後も授業者は、教科横断的に既習事項を意識するようにし、朝の会や他教科で話したり書いたりするときには繰り返し文章構成について児童に問いかけ、考える機会を設けている。

2.2 「環境問題について報告しよう」(五年 東京書籍)

2.2.1. 事前の取組

2020年6月に分散登校が始まってすぐに、国語科では教科書の順番に沿って「事実と考えを区別しよう」(五年 東京書籍, p.12-14)で情報の扱い方を学習した。ここでは、「グラフから読み取った事実と、その事実から考えたことを区別して表に書き表す」ことを学んでいる。

また、「図書館へ行こう」(五年 東京書籍, p.28-31)では、自分で本を選び意欲的に読むという読書活動が自力学習の力を養うためにも有効であるとして、図書館の利用の仕方を丁寧に扱っている。

学校図書館について「小学校学習指導要領(平成

29年度告示)解説 総則編」では、読書活動の推進のために利活用されることに加えて、「調べ学習や新聞を活用した学習など、各教科等の様々な授業で活用されることにより、学校における言語活動や探究活動の場となり、主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善に資する役割が一層期待されている」(p.91)と示されている。

授業者は、情報を集める上で、図書館の利用を習慣づけたいとの思いから、学校図書館、地域の図書館の利用を常に促している。その際、児童が自ら目的の本を探ることができるように、図書館における整理の仕方を教える必要があると考え、指導している。使用している国語の教科書(東京書籍 五年)「図書館へ行こう」では、日本十進分類法(NDC)が説明されている。

この指導に当たり授業者は、0～9までの種類の本を用意し、本にラベルを貼って示した。そして、次の単位につながるように4の自然科学を取り上げ、48の動物から何冊か種類をあげて説明している。教室の本にはすべてラベルを貼り可視化したところ、子供たちは大変興味を示し、学校の図書館の本のNDCによる種類分けを自主的に行うようになった。本のラベルを見て本棚を整理したり、まだラベルがついていない本にはつけようとする姿が見られた。自分の知りたいことが書いてある本の探し方が分かるということが、自分で探したいという児童の主体性を育み、自力学習の力となった取組であった。この学習後の単位では、学校図書館だけでなく公共の図書館にも行き、自分で本を借りてくる子が多く見られた。

2.2.2. 自力学習できるように意識した授業での取組

この単元の国語科で育む資質・能力は、「資料を活用して報告する」である。この単元の重点指導項目は、学習指導要領における「B書くこと(1)」の「ア 目的や意図に応じて、感じたことや考えたことなどから書くことを選び、集めた材料を分類したり関係づけたりして、伝えたいことを明確にすること。」、および「エ 引用したり、図表やグラフなどを用いたりして、自分の考えが伝わるように書き表し方を工夫すること。」である。

「情報の扱い方に関する事項」については、新学習指導要領で新設されており(p.8, 9)、中央教育審議会答申において、「教科書の文章を読み解けていないとの調査結果もあるところであり、文章で表された情報を的確に理解し、自分の考えの形成に生かしていけるようにすることは喫緊の課題である」と指摘されている。このことを受け、「情報と情報との関係」と「情報の整理」の二つの系統に整理して示された情報の扱い方に関する「知識及び技能」の資質・能力の育成についても指導方法を工夫して取り組まなければならない。

この「環境問題について報告しよう」という単元では、総合的な学習の時間との関連を図り、「防災」につながるテーマとして、「自然災害」について調べ、資料を活用して報告するようにした。この単元は、既習の「事実と考えを区別しよう。」(五年 東京書籍)で学んだ情報の扱い方を活かしながら、報告文を書く学習活動であった。既習事項である「序論・本論・結論」という文章構成を意識して書くための構成メモを、子供は各自で作成し、それを基に文章を書いた。この時授業者は、文を書くための知識や技能については個人差が大きいと感じられたと語っている。困っている子供には個別に支援をし、次は自力で学習できるようにと教師が意識して声かけし、指導を行った。

この実践では、総合単元的な学習と関連づけて防災に関わることを、子供が自分でテーマを決めて探している。『ジュニア学習年鑑』や、『日本のすがた2018』などの統計資料、百科事典などから資料を選び出し、環境問題について資料を活用して報告するのである。決定したテーマを調べるために、目的意識をもって図書館で借りた本を、家庭で読んで活用方法を考える自力学習は、子供が主体的に行っている。

児童は、文末表現や事実と考えを区別することなども意識するようになっていたので、授業者が日々取り組んでいることの成果が表れたとみることができる。情報を引用するときのきまりや、情報の出典を示すことも、授業者が意識して指導した。その結果、単元の終わりには、家庭学習で調べた際にも出典を書き入れてくるなど、児童の意識が高まっていた。

2.3. 「和の文化について調べよう」(五年 東京書籍)

2.3.1. 自力解決できる部分と全体の場で学ぶ場面を考えた学習計画

この単元では、「読むこと」と「書くこと」の2つの領域を指導することになっている。最終的には、「書くこと」の領域である「和の文化を調べよう」を扱うことになる。そのための基礎的知識を学ぶために「読むこと」の領域である「和の文化を受けつぐ—和菓子やさぐる」が掲載されている。

国語科の資質・能力として「言葉の力」では「必要な情報を見つける」「資料を使って説明する」が示されている。既習事項として使う言葉の力は、教材「動物たちが教えてくれる海の中のくらし」の単元を通して学習した「要旨をとらえる」ことと、教材「環境問題について報告しよう」で学習した「資料を活用して報告する」ことである。これらの学習を活かして系統的な学習で自力解決できる部分と、全体の場で学ぶ場面を考えながら授業を組み立てた。

村川(2020)は「家庭学習は主に宿題として、学校学習の補助的役割として、学習事項の定着を図るために位置付けられてきたが、今後は学校学習と家庭学習

を連動させた単元計画が求められる」(p.21)とし、「一人学び」の育成の必然性を主張している。

この実践では、ワークシートを使用し、家庭学習との関連を図りながら、指導書では全15時間となっている単元計画を、家庭学習を入れることで、全13時間で計画し実践した(表2)。これまでの学習から、並行読書や情報収集は、家庭学習等における自力学習にし、文章の構成や、パンフレットの構成メモも授業の前に予習として、自力学習でしておくというものである。

表2 「和の文化について調べよう」の単元計画

次	時	学習活動
1	1	・「和の文化」について書かれた本を紹介したり、モデルとなるパンフレットを提示したりするなどして、学習への興味をもたせ、パンフレットを作る計画を立てる。
	2	・今まで読んだ説明文での学既習事項を確認する。 (ワークシートを使用し、家庭学習との関連を図る。)
2	3	(並行読書は、家庭学習で) ・全文を通読し、文章の構成について考える。(家庭学習で考えたことから)
	4	・筆者の「和の文化」に対する考えを読み取り、3つの観点の構成の効果について考える。
	5	・本論の進め方について、筆者が用いている資料の効果について考える。
	6	・パンフレットにまとめる和の文化を決め、調べる計画を立て、情報を集める。(家庭学習でも情報を集め、構成メモを書いてくる)
	7	・グループで集めた資料を検討し、足りない観点に絞って情報を集める。
	8	・集めた資料を整理する。(図書館で本を探しておく。)
	9	・パンフレットの構成を考えて構成図にまとめる。
	10	・パンフレットの構成に沿って、文章を書く。
	11	
	12	
3	13	・学習してきたことを確認し、単元を振り返る。

2.3.2. 自力学習において児童の主体性をもたせるために

並行読書や情報収集を家庭学習に任せるためには、学習したいという児童の主体性が必要になる。そのた

め授業者は、学びの必然性や目的意識をもたせることを常に大切にしながら授業を進めた。単元の最終目標を、複数の資料や本から「和の文化」について調べ、報告の文章をパンフレットにしてまとめる言語活動【C読むこと(2)ウ】と設定した。

ただし、自力学習で主体性をもたせた学習がその単元での効果的な指導でなければならない。この言語活動が効果的な指導につながる理由として授業者は以下の2点を挙げている。

一つ目は、報告の文章をパンフレットにするためには、どんな観点から情報を集め、説明に使うのかを考える必要が出てくることである。これが児童にとって教材文を読む(C(1)ウ)「目的に応じて、文章と図表などを結び付けるなどして必要な情報を見付けたり、論の進め方について考えたりすること」の必然性となる点である。

二つ目は、できたパンフレットを学校図書館に置くようにすることで、伝える相手が明確になり、その意識を持ちながら文章をまとめる必要が生まれる点である。

このように、めざす資質・能力にふさわしい言語活動(C(2)ウ)「学校図書館などを利用し、複数の本や新聞などを活用して、調べたり考えたりしたことを報告する活動」を考え、情報の扱い方についても、【知識及び技能】(2)イ「情報と情報との関係付けの仕方、図などによる語句と語句との関係の表し方を理解し使うこと」と関連づけながら指導することで効果を高めることを意識していた。

授業中や文章を書く中で、自力学習したことの価値に気付くことが、家庭などで自力学習に主体的に取り組む姿勢を身に付けさせることにつながる。学習指導要領をもとに国語科における教科内容を確認し、自力学習の中に活かせる取り組みが必要である。

3. おわりに

限られた授業時間の中で学びを深めていくためには、自力学習ができる部分を家庭学習で行い、学校で

は、自力学習でわからなかった部分や友達と違った考えについて教え合ったり意見を共有したりして学びを深めていくとよい。表現技法などは、参考とする文章をまねることから始め、参考例文を見ながら自力で文章を書く力をつけるとよいと考えている。

しかし、先般のコロナ禍における休業期間中に提出された児童の課題ワークシートからは、家庭学習では前学年の既習事項が、教師が思ったほど使えないことが見えてきた。原因は、繰り返し使っていない、すなわち習熟まで到達していないことによる忘れか、その時に確実に習得できていなかったためと考えられる。その教材でおさえたい指導事項をきちんと指導し、確実に習得させ、次につなげることの重要性を再認識した。

2020年度、「書く」領域について、表現様式別に1年生～6年生までの6年間の指導内容を系統表に整理した(資料1)。それぞれの該当学年でどのような力をつけておかなければならないのかが一目瞭然である。それにより、教師一人一人が子供につけるべき力を意識し確実に身に付くよう指導ができる。今後は、他の領域についても系統表を作成し、そこで「つけた力」を使って自力学習のできる課題の具体について探っていききたい。

参考文献

- ・『新型コロナウイルス感染症対策に伴う児童生徒の「学びの保障」総合パッケージ』文部科学省
- ・小学校学習指導要領(平成29年告示) 総則編 p.91
- ・小学校学習指導要領(平成29年告示) 国語編 p.37
- ・田中博之(2020)『『主体的・対話的で深い学び』に向けた授業づくりのポイント』『新教育ライブラリ』Vol.2, ぎょうせい, p.110-111
- ・天笠茂(2020)「新型コロナウイルス感染症とカリキュラム・マネジメント」『新教育ライブラリ』Vol.2, ぎょうせい, p.106-109
- ・村川雅弘(2020)「ピンチをチャンスに」『新教育ライブラリ』Vol.2, ぎょうせい, p.18-21
- ・田中博之(2017)「家庭学習アイデアブック」明治図書, p.10-12

(資料1)

(手紙文)

	第1学年	第2学年	第3学年	第4学年	第5学年	第6学年
単元・教材名と学習活動		手紙を書く 『「ありがとう」をつたえよう』 ・「ありがとう」と伝えたい人へ手紙を書いて気持ちを伝える。	大事なことを手紙でつたえる 『案内の手紙を書こう』 ・身近な人に、学校やクラスの行事を案内する手紙を書く。	相手や目的を考えて手紙を書く『お願いやお礼の手紙を書こう』 ・お願いやお礼など、用件に合わせて手紙を書く。 ・文章のよいところをたしかめる。 『「言葉のタイムカプセル」を残そう』 ・十年後の自分に向けて今の自分のことを伝える、「言葉のタイムカプセル」を作る。		
指導参考例		・手紙を書くことを考えて書き読み返して仕上げ。 ・140字程度	・案内の手紙を書くときに大事なことを考えながら、手紙に書くことをたしかめ、下書きをし手紙を完成させる。 ・300字程度 ・宛名の書き方	・相手や目的がわかるように用件をはっきり具体的に書く。 ・手紙の形式、前文、本文、末文、後付けに気をつけて書き、読み返す。 ・四年生になってからの一年間に書いてきた文章を1冊にまとめて文集を作る。 ・十年後の自分に手紙を書く。 ・300字程度		
言語活動例			Bイ	Bイ		